

中国の山と宗教見聞記（その四）——中岳嵩山・金華山

薄井俊二

はじめに

二〇〇五年より、科学研究費補助金や埼玉大学研究プロジェクトの助成金を得て、中国の山岳を見て歩く機会を得ている。その折の概要と見聞についての報告を続けているが、本稿はその第四である<sup>(1)</sup>。今回は、河南省の中岳嵩山と浙江省の金華山について報告する。

I 中岳嵩山初訪

一 中岳嵩山について

(一) 山の位置

嵩山のある河南省は古名を「豫」という(図1)。省都は鄭州市。いわゆる中原であり、黄河文明発祥の地として、古くから開発されてきたところである。

鄭州から嵩山のある登封市までは南東に約八〇キロ、洛陽か

らは東へやはり八〇キロ程度。両古都から徒歩で、二〜三日の距離にある。

嵩山は、伏牛山脈の東端に位置するが、平原・低丘陵地帯の中にあつて、忽然と聳える観がある。

(二) 概要

嵩山は五岳の一つ(中岳)に数えられる。大きく二つの山塊からなり、東を太室山、西を少室山という。古くは太室山を嵩山と称した。

歴史を見れば、嵩山の名は「詩経」崧高に見えるともいわれるが、この詩での崧は必ずしも固有名詞ではない。「尚書」禹貢に見える「外方」が嵩山のことだとする説があるが、その説も後漢の班固が初出である。爾雅や山海経にも中岳や嵩山の名が見えるが、年代を特定しがたいものである。中岳嵩山が実体を伴って姿を現すのは、漢の武帝期である。

「漢書」武帝紀によれば、元封元年（前一二三）、泰山での初めての封禪の儀に向かう途上、武帝は嵩山に立ち寄る。夏后啓母石を見た翌日嵩山に登るが、途中で「万歳」の声を聞いたという。これを吉兆とした武帝は、太室祠を増し、山中を禁苑扱いとし、奉邑（今の登封）を設けて、山名を「嵩高」と改称するなど、嵩山を顕彰する措置を施した。

その後、歴代皇帝などに尊崇され続けるが、達磨大師の伝承があるなど仏教の力が強まり、北魏時代には多くの寺院が建立された。唐代には副都であった洛陽に近いことから、政治との結びつきが強まる。ここを本拠地としていた道士・僧侶らが皇帝の崇敬を受け、道教・仏教（とりわけ禅宗）は、それぞれ自派を拡大した。中でも則天武后は、高宗朝時代から嵩山に通い、自ら即位したのちの天冊万歳元年（六九五）には、嵩山で封禪を挙行している。その後も代々の王朝から尊崇され続けるが、「五岳の中」と誇るわりには、他の四岳からぬきんでて重んじられたわけではない。東岳泰山が泰山府君信仰などと結びついて重視されていったことは対照的である。あるいは政治の中心に近すぎることが、山の神聖性を減じていたのかもしれない。少室山北麓の少林寺は、六朝時代にさかのぼるともされる古刹だが、いわゆる拳法と結びついたのは比較的新しい。二十世紀以降になって武術学校が相次いで作られ、少林寺拳法の名を広めた。

二〇一〇年、少林寺・嵩岳寺塔他の歴史遺跡十一点が「天地之中」（英名：Historic Monuments of Dengfeng in “The Centre of Heaven and Earth”）として世界遺産に登録された。

地理を描写すれば（図2・3）、東に位置する太室山の最高峰が、かつての中岳嵩山であり、いまは峻極峯と呼ばれる。太室山は三十六峯を数えるが、その呼称は明代以降のものである。南麓に後漢時代の創建と伝える法王寺や北魏時代の塔が残る嵩岳寺、漢武にまつわる將軍柏がある嵩陽書院などが並ぶ。太室山の東端が黄蓋峯で、その南麓に中岳廟がある。北魏時代の石碑が残り、古来の五岳廟の姿を伝えるものとなっている。廟のすぐ南に太室闕がある。漢代の構造物で、門状のものに文字や模様が彫られている。少室闕・啓母闕とともに、嵩山における現存最古の建造物である。

西に位置する少室山も三十六峯を数えるが、これも宋代以降の称。北麓に達磨大師以下仏師にまつわる遺跡などがあり、少林寺がある。少室山の北麓から西北に行くと、轅轅関がある。洛陽へ通じる道である。

登封市の東南に十五キロばかり行くと、告成鎮がある。もと陽城の地だが、則天武后が嵩山で封禪を行った際、今の名に改称された。そこには元代に郭守敬らが築いた天文観測台である「観星台」が現存する。そのさらに東南に、石淙会飲という景勝の地がある。ここをさらに東南に進むと許昌市へと続く。

## 二. 見聞記

### (一) 目的

五岳の一つ、中岳嵩山を見て、体感すること。また原形をとどめるといふ中岳廟を見ること。二〇一〇年七月の新聞報道に、慈覚大師円仁に関わる出土品が、法王寺から出たとあった。そ

ここで法王寺も確認することとした。また訪問当時、初唐時代の天台山の詩を翻訳中であつたが、そこに則天武后が催した宴会にまつわる詩集があつた。その宴の場所を見ることも目的に加えた。少林寺についてはあえて外した。大橋修一先生からは、中岳廟の「中岳高高靈廟之碑」（北魏）を見てくるよう勧められた。

## (二) 旅程（単独行）二〇一〇年九月二〇日～二三日

1. 成田↓（飛）↓北京↓（飛）↓鄭州（鄭州市泊）
2. 鄭州・河南省博物院見学↓（車）↓密県・打虎亭漢墓見学↓（車）↓登封市・嵩陽書院・法王寺・老母洞見学（登封市泊）
3. 登封：中岳廟・石淙会飲見学↓（飛）↓北京（北京泊）
4. 北京：瑠璃廠・胡洞見学↓（飛）↓成田

## (三) アクセス

嵩山を訪ねる場合は、奉邑であつた登封市が拠点となる。こはいわば山麓の門前町で、ここから嵩山のどこへもいける。少室山北麓の少林寺周辺も宿泊所などがあり、かつては少林寺そのものも旅行者を泊めていた。明代の旅行家徐霞客は、嵩山滞在時は、中岳廟と少林寺に泊まり、そこからそれぞれの山に登っている。

## (四) 見聞報告

初日は、移動日。北京から鄭州へは飛行機で一時間半程度。市内の新華建国飯店に泊。

二日目は、先ず市内の河南省博物院を見学。ちょうどこの年の夏、日本の東京国立博物館で、「誕生！中国文明」と題して、河南省博物院とのコラボレーション企画が行われていた。その内容と重複するものもあつたが、さすがに本家の方が量・質ともに圧倒していた。例えば、一九八二年に太室山の北麓から発見された「武則天金簡」が展示されている。久視元年（七〇〇）の銘があるが、則天武后が神に、罪を祓ってもらふよう祈つたものである。

次いで車で西南に進み、密県の打虎亭漢墓を見学（写真1）。鮮明な画像が残されている墓室が二つある漢代の地方豪族の墓。一九六〇年頃、農業用水路を開削中に発見された。当初は貴重なものとして観光客も多かったようであるが、高速道路がこの横を通過したことから観光ルートから外れてしまい、また画像のある墳墓が他にたくさん発見されたことから、いまでは訪れるものも少なく寂れている。この日も稿者が訪れると門の鍵を開けて中に入れてくれるというありさま。入場料を払って墓室に入り、係員に「写真を撮っていいか？」と聞くと、「〇〇元支払えば可能だ」という。そこで支払ったところ、係員は自分のポケットに入れてしまった。

次いで登封市に入り、太室山南麓の施設を巡る。先ず嵩陽書院。北魏時代に嵩陽寺として創建され、唐代には嵩陽観という道観となり、宋代に書院となつた。程明道・伊川兄弟も講学した宋代有数の書院である。苑内に漢の武帝が賞賛したと伝える柏の老木があり（写真2）、將軍柏と称されている。また門前には「嵩陽観感応碑」はじめ幾多の石碑が聳える。

次に嵩岳寺塔（写真3）。嵩岳寺は、北魏に皇室の離宮とし

て創建されたのが、隋代に寺院となる。現在は寺院としては機能しておらず、北魏のものと伝えられる塔だけが残る。ゆるやかなドーム型の屋根や桃の実を伏せたような窓枠、獅子のレリーフなど、インドやガンダーラの風味がある。中国風の塔とはかなり感じが異なっており、仏教伝来からほど遠くない時代の姿を伝えるのではないか。

三番目に法王寺。寺伝によれば、後漢明帝の創建というがおそらく仮託。清代の建造物が残るが、現在あるものの多くは、ごく近年に再建されたもの。ガイドによれば、長らく廃寺同然で、十数年前に訪れたときは、塔が畑の中にぽつんと立っているだけだったという。それが、靈感を得たという人物が僧侶となり、彼の占いがよく当たるといので弟子や参集者が増えてきた。一九九〇年代から党の幹部などから多くの布施を集め、経済的に栄え、建物もどんどん増設しているという。迷信につけ込んだ拝金主義的なりかただと、共産主義全盛期に育ったガイドは憤慨していた。

背後の山に、二つの塔があり、二つは唐代のものと伝える(写真4)。円仁が関わったという石碑が発見されたのはここだが、日本では石碑の偽作説もでていいる。金儲けに走るお寺だとすれば、そうしたこともあり得るだろう。

あいにくの雨で、近景のみで、太室山の景色は全く見えない。そこで宿に行こうとして、ふと横道入ると、老母洞への道であった。史書にも見えるもので、老君洞・無極洞(写真5)とも称され、唐代に道士の潘師正が穿つたと伝える洞である。洞そのものは見る機会を逸したが、背後に太室山が迫る様も実見

でき、思わぬ収穫であった。

登封市の東の端、中岳廟よりの天中大酒店に泊。

三日目、早朝散歩に出る。すつかり晴れており、遠くまでよく見える。太室山の南麓が見通せ(写真6)、昨日訪れた嵩岳寺塔が、緑の南麓に浮かび上がっているのが望見される。少室山(写真7)や、南に平野を挟んだ箕山も見える(写真8)。嵩山の空間的な把握に、大いに資するものがあつた。

朝食後、先ず中岳廟へ(図4・写真9)。秦代の創建で、もと太室祠といったと伝え、漢の武帝が訪問した。北魏時代に中岳廟と改称。もと黄蓋峯の山頂にあり、その後も移動を繰り返したが、唐代中頃に現在の地に落ち着く。現存の建物は清代の再建。中岳大殿など大規模な建築物が残り、五岳廟の姿をよく伝える。唐宋以来の古木も多く、北魏の「中岳嵩高靈廟之碑」(写真10)など石碑が多数あり、北宋時代の鉄人像が四体ある。

黄蓋峯の中腹まで登り、南望する。

廟を出ると、中岳廟から真南に道が伸び、行き止まりに太室闕がある。漢代に作られた門状の建造物である。かつてはむき出しだったようだが、今は小屋がけに覆われていて、あらかじめ許可を得ないと開けて見ることができない。ところが、まどの網戸に小さな穴が開けられており、部分的ではあるがそこから中を覗き、写真を撮ることもできた。

いったん登封市へ戻って昼食を取り、午後は告成鎮へ。

登封市から東に七キロあまりで盧店鎮で、そこから南へ七キロあまりで告成鎮である。

元の時代、授時暦の作者でもある郭守敬らによって、全国各

地に天体観測所が作られた。告成鎮のそれは、観星台（写真11）と呼ばれその中心的役割を果たすものであった。台形型の高さ十メートルを超える建築物である。

次いで告成鎮から東へ数キロのはずの石淙会飲を探すが見つからない。数年前ガイドが行ったことがあるが、その道が無くなっているという。さんざん聞いて回りようやくたどり着く。ここは石淙河が岩を削って形成した名勝である（写真12・13）。兩岸は絶壁をなし、中に奇岩がよきよきと聳える。平地が広がる中に、突然溪谷が姿を現すものとなっている。則天武后は洛陽から群臣を引き連れてしばしば避暑に訪れていたが、久視元年には狄仁傑をはじめとする大臣・文人を集めて蘭亭の遊びをした。その折りの詩十七首が残っており、川中の岩に彫られている。「石淙会飲」とは、このことにちなんだ嵩山人景の一つである。明代に嵩山の地理書である『嵩書』を撰述した傅梅という男がいるが、彼の署名が砂岩に刻されていた。

景観としてはすばらしく、則天武后らが愛したというのもうなずけるものであったが、現状は全く保全がなされていない。嘗て観光地化が図られた<sup>(2)</sup>というが、お客が集まらずに寂れていったという。それに追い打ちをかけたのが石炭の採掘である。

そもそも登封市あたりは、浅い石炭の層があり、貴重な鉱物資源として地域の産業の根幹の一つとなっているとのこと。少林寺あたりと嵩山のみは、観光の対象として免れているが、それ以外の場所では露天掘りの採炭が盛んになされている。告成鎮などはまち全体が石炭の粉で黒々としている。おそらく深刻な公害を生んでいるものと思われるが、産業優先の現状では無

視されているのではないか。石淙河の流れも石炭の粉塵がたくさん混じっていて、清流とはとてもいえない状態である。ここが見つからなかったのも、道路が採炭用に専用されていたためであった。

嵩山と登封市自体は、世界遺産登録に際しての基盤整備が進んでおり、道路やトイレなど大変きれいになっている。観光地としては少林寺しか知られていなかった数年前とは様変わりだ、今後は日本など外国からの観光客も多く登封と嵩山に訪れることだろう。その一方、石淙会飲などは採炭と化学工場との中に埋もれてしまい、忘れ去られてしまうのではないだろうか。鄭州へ車で向かい、飛行機で北京へ。ホテル到着は夜中の零時となった。京倫飯店に泊。

四日目は、午前には瑠璃廠散策。古書店などをめぐる内に、胡同の中に入ってしまう。狭い路地を人々の生活を長めながら歩く内に、ガイドが嘗てあった性的な施設について紹介してくれた。清末から民国にかけて、妓楼がたくさん作られ、その一つがホテルとして残っているという<sup>(3)</sup>。

#### (五) まとめ

今回は五岳の二つ目として嵩山を選んだ。山頂に登るには至らなかつたが、雨にけぶる山麓の塔を見、三日目の早朝に太室・少室両山の遠景を眺め、箕山との間の空間を体感したなど、嵩山を体で感じ取ることができたことは収穫である。登封と告成という二つのまちの位置関係・距離感なども感じることでできた。太室山では山麓型道観と思われる隆唐観を見逃したこと、

少室山北麓の少林寺関連施設や洛陽への道にあたる轅轅関などは、次回の課題である。

高山の世界遺産登録に関連してたくさんの出版物が出されている<sup>(4)</sup>ことは、高山を研究するのに資するところが多いし、道路などのインフラ整備がとも進んでいることも歓迎すべき事だろう。一方、産業優先の流れの中で、貴重な景勝が失われたり、公害を生んでいるであろうこと、一部の宗教団体・施設が拝金主義に走り、人々がそれに追従してしまっていることなど、今の中国が抱える課題も多く目にした旅であった。

## II 金華山初訪

### 一 金華山について

#### (一) 山の位置

金華山のある浙江省は古名を「浙」という(図1)。省都は杭州。金華山は、浙江省の中央部にあり、義烏市から金華市・蘭溪市にわたって東西に伸びる山塊をなす(図5)。双龍洞などがあるのは金華市域で、山塊の西端の六洞山は蘭溪市域に属す。金華市は杭州から南に二百キロ。

#### (二) 概要

金華市の北に山脈が並ぶことから北山ともいう。伝承によれば、南北朝の晋代に皇(黄)初平という道士がここで悟りを開いたという。彼の号「赤松子」から赤松山とも呼ばれる。以後道観や仏寺が開かれ、宗教的な山岳として重視され、三十六洞

天の最後を飾る。文人では、南朝梁の劉孝標(四六二〜五二二)は、「世説新語」の注釈者としても知られるが、政界を見限った後の隠遁先に金華山を選んだ。彼が山中で学を講ずると、江南地方の名士たちが集まり、大変な賑わいとなった。その場所は洞窟であったので「講堂洞」と呼ばれたという。その後、李白や陸游などが訪れて詩歌を作っている。南宋時代には金華市(当時の名は婺州)出身の呂祖謙(一一三七〜八一)が朱子らと肩を並べるほどの活躍をするなど、文化的・経済的にも栄えた。その後も、水運の要衝として栄え続けるが、太平天国軍が拠点をおいていたことから、太平天国の乱に関わる旧跡も多い。のちに鉄道や高速道路が発達してからも、浙江省中央部の交通の要衝として重要な位置を占め続けている。特産品としては中華料理に欠かせない金華火腿がある。

金華山は石灰岩質で、鍾乳洞がたくさんあることも、道教との関係につながっている。金華市域には、双龍洞・冰壺洞・朝真洞の金華三洞が有名であるが、近年は太平天国軍が潜んだという仙瀑洞が観光地として注目を集めている。山麓に智者寺、山中に鹿田寺があつたというが今は存しない。中腹の双龍洞のあたりに金華観があり、山中の鹿田湖がひろがる平地に黄大仙祖宮がある。金華山脈の蘭溪市にかかる部分を六洞山といい、涌雪洞(別名地下長河)などの洞窟がある。

## 二 見聞記

### (一) 目的

前年から、明末の旅行家である徐霞客の遊記に注目し、翻訳

を始めた。彼の晩年の中国南部大旅行記では、詳しい記述を浙江省から始めており、そこでの主な訪問先が金華山であった。そこでこの山を実見することを第一の目的とした。茅山を訪れた際、洞窟のありように惹かれるところがあつたが、徐霞客の興味も金華三洞・蘭溪三洞の探訪にあるため、洞窟見学を中心とした。また徐霞客の旅は、河川のあるところは船旅が主である。钱塘江の上流にあたる富春江は、徐霞客が浮かんたところでもあつた。そこで富春江を遊覧し、徐霞客の旅を偲ぶことを第二の目的とした。

## (二) 旅程(単独行) .. 二〇一一年十二月二十三日〜二十六日

1. 成田↓(飛) ↓杭州↓(車) ↓金華(泊)
2. 金華・金華山にて金華三洞など探訪、蘭溪・六洞山にて涌雪洞など探訪、金華(泊)
3. 金華↓(車) ↓富春江遊覧↓(車) ↓杭州(泊)
4. 杭州↓(飛) ↓成田

## (三) アクセス

水運の時代は、杭州から钱塘江を遡り、富春江・蘭溪江と名を変えつつ南下、蘭溪市から主流を離れて東南に婺江を遡れば金華市に至る。金華市から北に十キロあまりで羅店という集落があり、ここが金華山の麓である。ここから登るのがメインルート。西の蘭溪市からも入山できるが、その場合は六洞山を経由する。明末の徐霞客は、金華市から羅店を経て入山し、山中遊行の後、蘭溪市へ抜けている。

鉄道と高速道路では、杭州から南下し、義烏市を経て西南に向かい、東側から金華市に入る。今回は、先ず高速道路で義烏市經由で金華市に入り、帰りは富春江沿いに北上して杭州へ戻った。

## (四) 見聞報告

初日は移動日。金華世貿大飯店に泊。

二日目は、車で金華山を巡る(図6)。市から北に進み、羅店から右に折れて登る。双龍洞あたりを通過して、先ず山奥の黄大仙祖宮を訪ねる(写真14)。一九九六年に作られた道観だが、山頂を借景にした、立派で広大なもの。線香売りのおばあさんに大いにたかられてしまった。ここが観光地としては一番奥。

ついで少し戻って仙瀑洞(写真15・16)。ここは近年になって観光地化されたものだが、中に大きな瀑布があることからの命名。太平天国軍との関わりも喧伝されているが、中ほど派手なイルミネーションで飾られ、美しいといえば美しいが、道教的な静謐さとはほど遠い。高低差がともあり、階段やはしごの上り下りを繰り返しているうちに、ガイド(稿者よりもかなり若い)が気分が悪くなってしまう。

少し休んで下り、金華三洞第一の双龍洞へ。門前町として洞前村があり、古い地図にもその名が見える。双龍洞は入り口の岩が二匹の龍の姿に似ていることから命名というが、よく分からなかった。外洞と内洞からなり、外洞は一二〇〇平米ほどもあるドームをなしている(写真17)。その一角に、小さな穴があり、下半分は水に浸かっている。そこに平底のボートを浮

かべ、その上に伏せて内洞に入る。徐霞客らは脱いだ服を、逆さまにした笠に乗せて泳ぎながら入ったという。数秒で穴をくぐれば、内洞が広がる。様々な奇勝が展開する、みごとに鍾乳洞である。残念ながら絞りの関係もあつて写真はうまく撮れなかった。しばらく進むと氷壺滝（写真18）。既に氷壺洞に在る。双龍洞と氷壺洞との間を掘削してつなげたらしい。壺型の石に滝が流れ落ちていることからの命名である。滝の横のはしごを登ると、氷壺洞の口に出た。双龍洞の入り口から遙かに高い所であった。

ガイドの体調も考慮して、三洞の三番目の朝真洞は省略。一旦下山して田舎料理の昼食。のち蘭溪地域の六洞山へ向かう。ここはかつては靈洞山や洞源山とも称されていたが、六つの洞が有名であることから六洞山と呼ばれている。そのうち、涌雪洞を訪ねる（写真19）。ここは地下長河とも呼ばれ、入り口からは小舟に乗って入る。ちょうど入り口の池の改装中であつたが、現地ガイドの少女の案内で穴に在る。数分水に浮かんで進み、上陸。あとは歩いて中を巡るが、ここでもカラフルな光を浴びた、様々な景色が展開していた。奥から外へ出ると玉露洞という出口で、入り口からかなり高い所であつた。

山を下り、羅店を通過してさらに東へ進み、赤松道院を訪ねる（写真20）。金華山の支脈が東南に伸びているのだが、その中腹に位置する道観。ダム建設により水没したものが、一九九六年に再建されたもの。いなか道観の風情だが、黄大仙祖宮よりも遙かに古くからあつたものである。

市内に戻り夕食。犬料理が検討されたが、地元民である運転

手によれば、新鮮な犬を出すかどうか疑問であるとのこと、豚料理に落ち着く。宿泊地は前日と同じ。

三日目は、富春江遊覧。ゆつくりホテルを出発し、川沿いの高速道路を北上。富春江鎮から高速を降り、河沿いに少し戻ると、嚴子陵釣台への渡し場に着く。嚴子陵釣台（写真21）は、漢代の隱者、嚴光（子陵）が、そこで釣りを楽しんだと伝える景勝。実際は自然物の岩だが、李白をはじめ、多くの文人がここで詩を詠んでいる。

モーターボートで川面を疾走したのち、釣台の埠頭に上陸。様々な石碑が並ぶ中を釣台に登る。頂は水面から約七十メートル、二つの方形の岩が、川に面して聳え立つ。頂から川上や川下を眺めれば、確かに絶景である（写真22）。ダムが近く、水かさが高いせいもあるが、見渡す限り川沿いに平地は全くなく、舟によらなければ隣町に行けないのが分かる。山形県の最上川沿いの集落を思い出させるものがあつた。

再び車に乗って、洞廬へ向かい、昼食。ここは臨安市の西の分水から流れてきた分水江が、富春江に注ぐ所に位置する。徐霞客は臨安から分水を経て、水路でここにたどり着き、次いで富春江を遡上している。思いがけず彼の経路の一部を実見することができた。桐廬市は近代的なビルが建ち並んでいるのだが、その一方、水上生活者の姿も見え、新旧の姿が同居している様子も伺えた（写真23）。

杭州市に帰り、まちの西のはずれにあたる海外海西溪賓館に泊る。四日目は、早朝にホテルの周囲を散策。運河が張り巡らされているのを体感できた（写真24）。後に調べたところによれば、



もう少し西へ行けば「西溪湿地」という湿地帯が広がっていたようだが、次の訪問への宿題である。

## (五) まとめ

今回の訪問は、徐霞客の旅の一部をたどることを主にしたが、四つの洞窟を訪ね、河川での遊覧も体験できたことで、所期の目的は果たせたといえる。徐霞客は、洞窟巡りのあと、そのリンク付けを行っており、双龍洞を第一としている。今回訪ねた四洞についていえば、けばけばしいイルミネーションや、涌雪洞のボート内でガイドの少女が携帯電話でがなりたてていたことなど、興を削ぐことは多々あったものの、それらも含めて鍾乳洞の有り様を体感できたことは大きな成果であった。また涌雪洞において、洞中で働く人と話を少ししたが、彼の人は朝から晩まで洞窟で働いているわけで、現代の洞窟生活者ともいえることに気がついた。道士の修行とは大いに異なるものであるが、地中の奥底の洞窟で長時間過ごすことについて、話を聞いてみればよかったと反省している。

イルミネーションについて、茅山の華陽洞では全く施されいなかったが、ガイドブックなどによれば、どの洞窟もけばけばしさを競っているようである。洞天を感じさせる洞窟に出会うのは、しばらくは難しいのかもしれない。

富春江については、まがりなりに船旅の一端を体験したところ、桐廬において、水上生活者や水辺の生活ぶりを確認したことが成果といえよう。

注

(1) 前稿の「その一」(本誌第十一号、二〇〇七年)では天台山と廬山を、「その二」(同第十二号、二〇〇九年)では五台山と王屋山を、「その三」(同十三号、二〇一〇年)では南岳衡山と茅山について報告した。

(2) 一九八五年に中国で刊行された『登封名勝文物志』という冊子があるが、その表紙は嵩山を背負った嵩岳寺塔で、裏表紙は石淙会飲である。当時この地が、嵩山を代表する名勝だとされていたことを物語る。

(3) ホテル名は長宮飯店といい、外国人のバックパッカーなどに人気だという。

(4) 例えば、『嵩山歴史建築群』(科学出版社、二〇〇八年)は、嵩山にある建築物の詳細な図版や地図を収録しており、大変貴重である。

● 中岳嵩山・金華山関係の資料(日本で刊行されているもの)  
・ 日本で嵩山を取り上げた専著としては、昭和七年に増田亀三郎による『菩提達磨嵩山史蹟大観』という大部な資料集があり、昭和五十六年に三宝書院からリプリント版が出ている。その他にはめばしいものはない。金華山を取り上げた専著・論文も日本語のものはない。

## ● 図版

図1 嵩山・金華山位置図：薄井作成

図2 登封市図・「嵩山旅游交通図」湖南地図出版社、二〇〇

- 一年 より
- 図3 嵩山山内図…「嵩山旅游交通図」湖南地図出版社、二〇〇一年 より
- 図4 中岳廟全図…『登封市志』中州古蹟出版社 二〇〇八年 より
- 図5 金華山近郊図…グーグルアースより
- 図6 金華山山内図…金華山内入場小冊子より

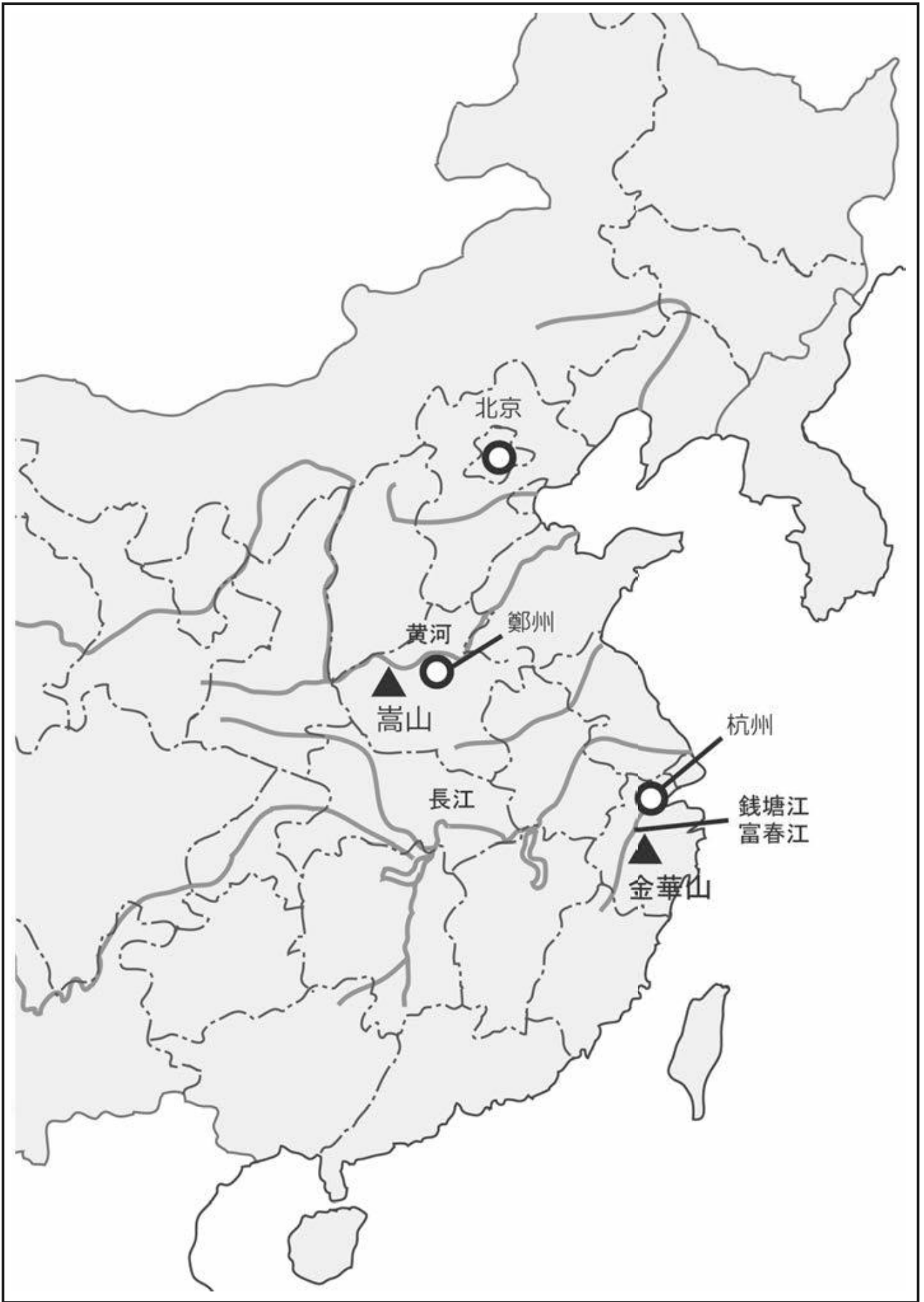


图1 嵩山·金華山位置图

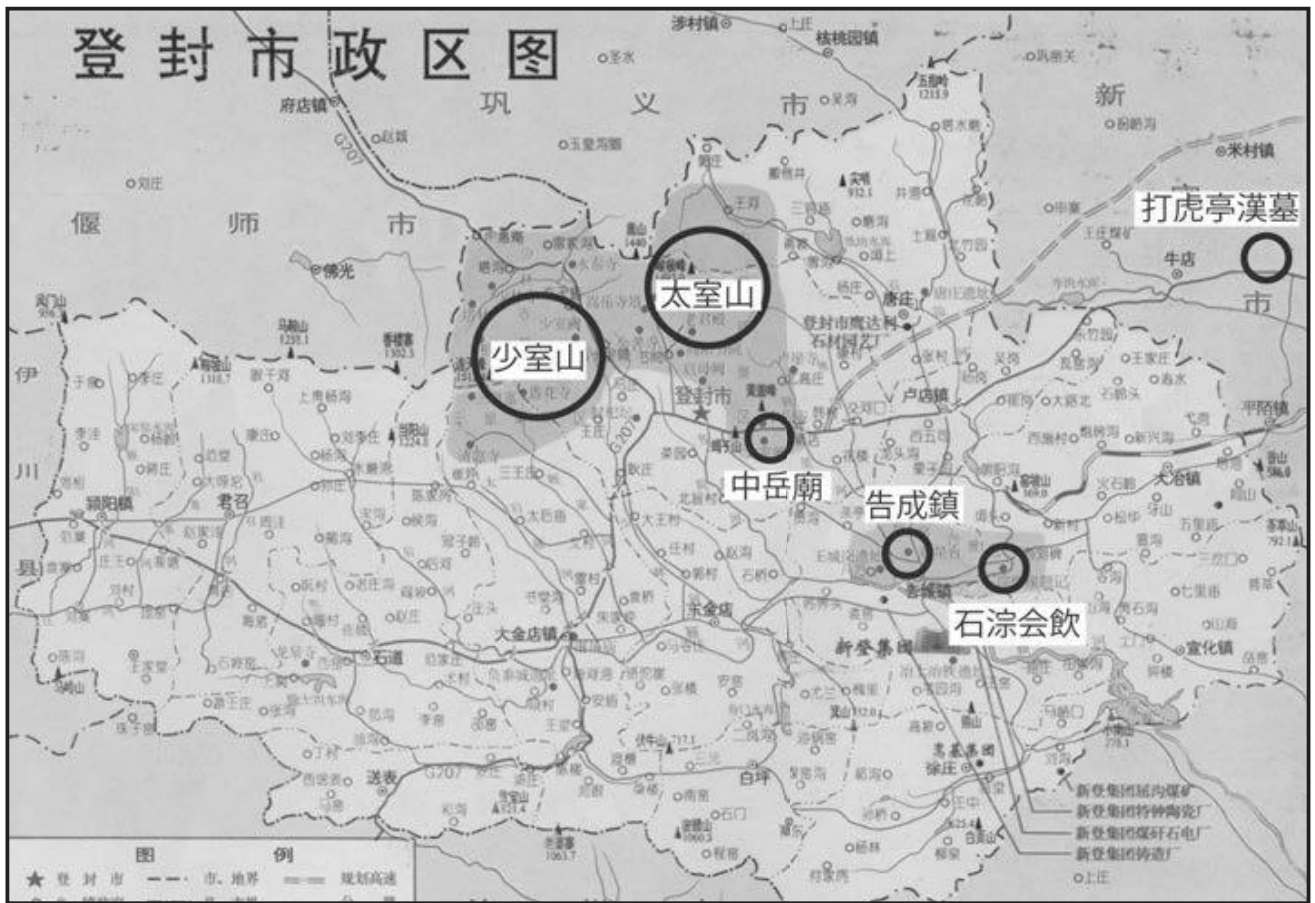


图2 登封市图

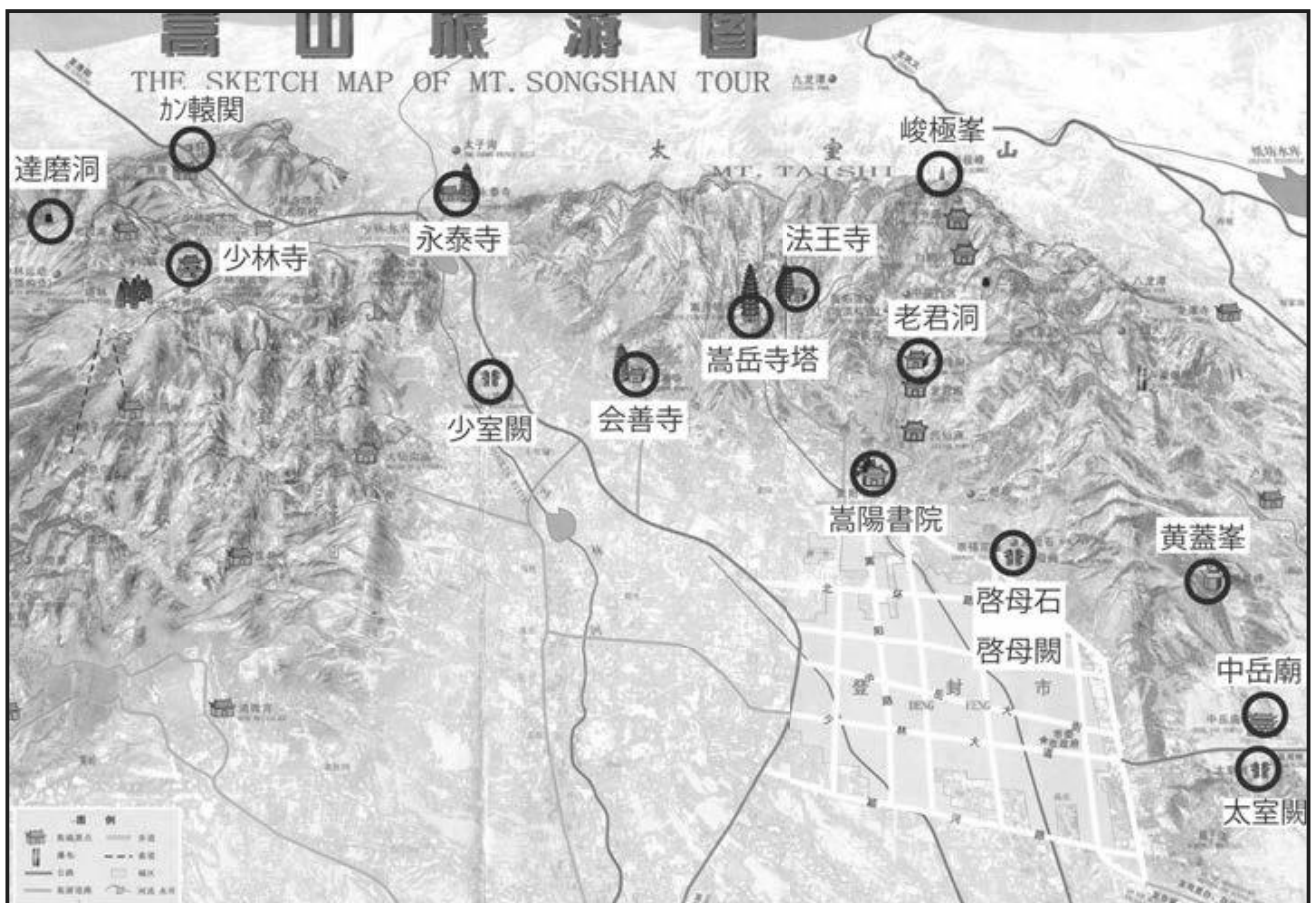


图3 嵩山山内图

中岳庙全图

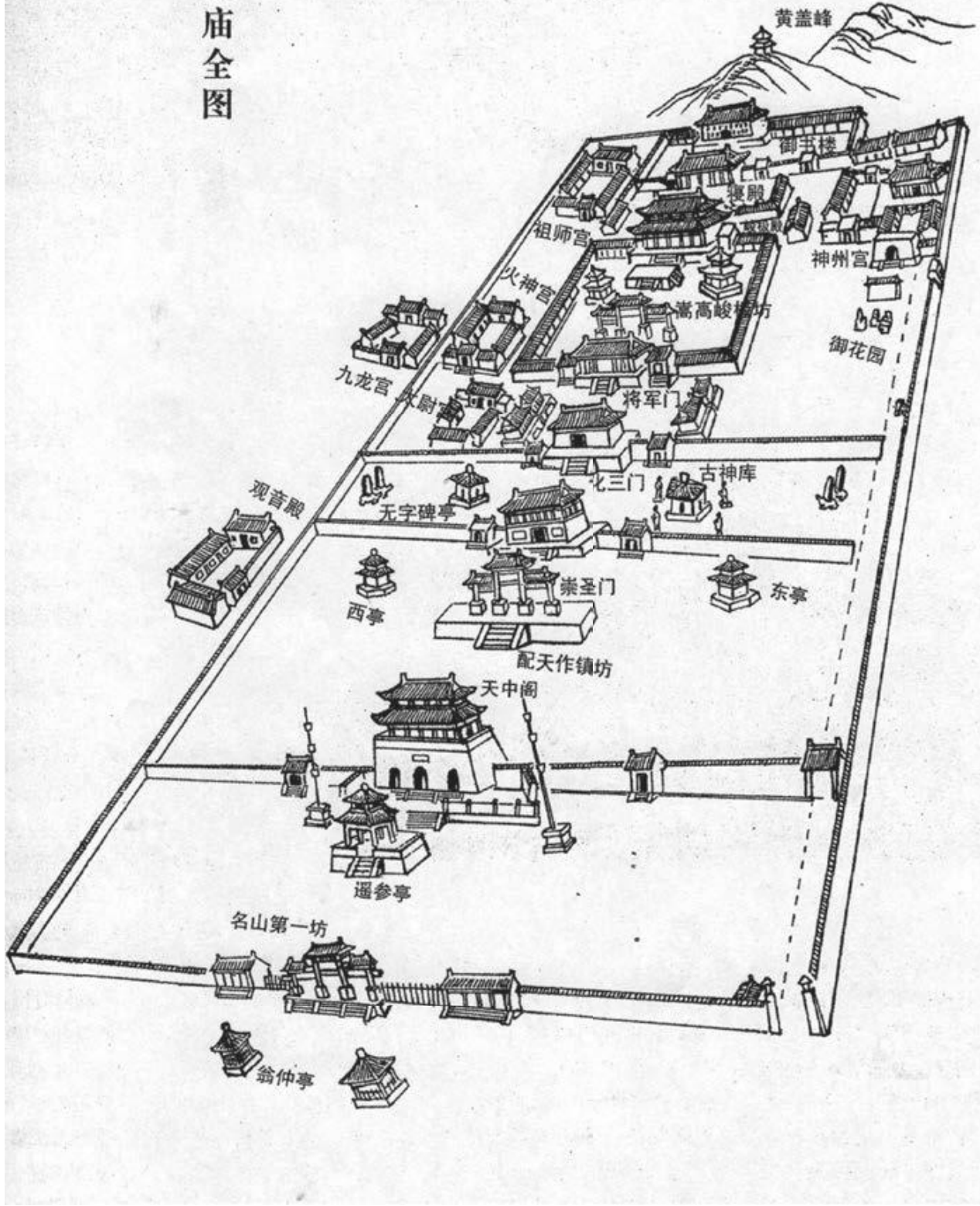


图4 中岳庙全图

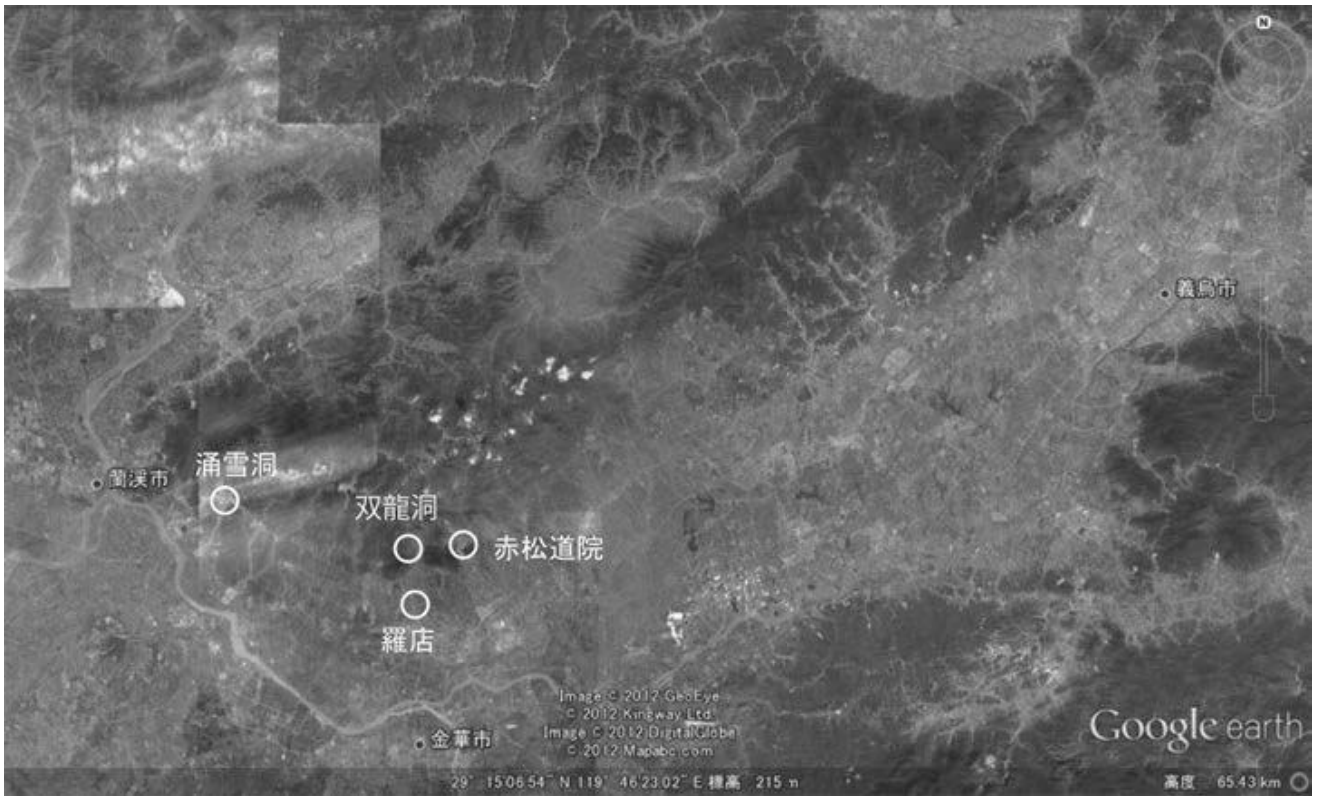


图5 金華山近郊图

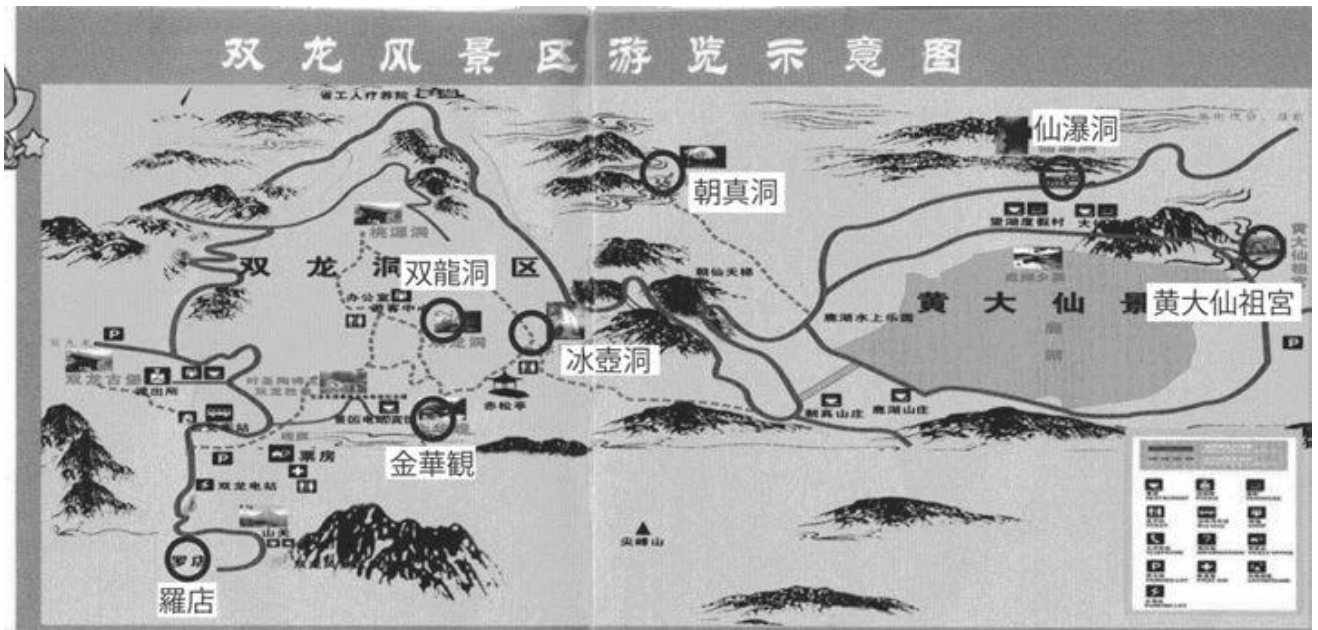


图6 金華山山内图





写真1 打虎亭漢墓



写真2 嵩陽書院の將軍柏



写真3 嵩岳寺塔



写真4 法王寺塔



写真5 老母洞



写真6 太室远景





写真7 少室遠景



写真8 登封市を挟んで箕山遠景



写真9 中岳廟門前



写真10

中岳崇高靈廟之碑

右が本物、左は模造品



写真11

觀星台



写真12

石淙会飲(1)



写真13 石淙会飲(2)



写真14 黄大仙祖宮



写真15 仙瀑洞外觀  
麓の家屋から入り、  
山頂から出る

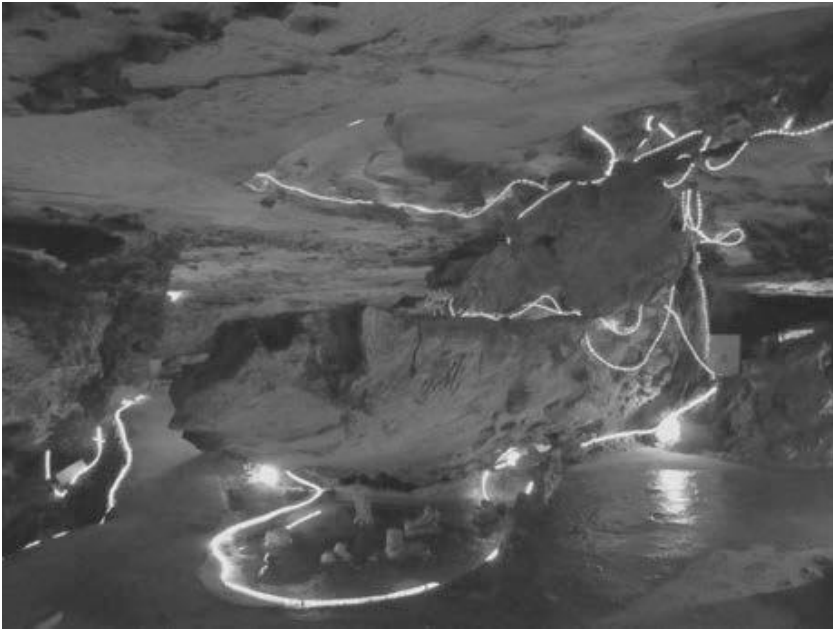


写真16  
仙瀑洞の内部



写真17  
双龍洞の外洞



写真18  
冰壺滝



写真19  
涌雪洞入り口



写真20  
赤松道院



写真21  
巖子陵釣台



写真22

富春江遠景

嚴子陵釣台上から



写真23

桐廬

分水江が富春江に注ぐ



写真24

杭州市内の運河